

# 児童文学研究—その(4)—

## 子どもの心理・大人の心理

高 山 浩 子

### 1. はじめに

児童文学は、一般の文学の場合と同様、発信者と受容者によって構成されることは間違いないが、発信者と受容者の心理に大きな開きが存在することがある。この相違は、場合によっては、発信者の意図の通りに受容してもらえないことを意味する。こうした齟齬が、児童文学の伝達上の問題を引き起こすのである。

一般に発信者としての大人は、自分の感覚で表現することが多いけれど、それは大人のレベルでの発信である。つまり、知的・言語的なことはもとより、感情的にも大人のレベルから発想するのである。これは直接的に伝達することになると、受容者としての子どもには負担が多く、内容の理解度が低下する恐れがある。

一方、受容者としての子どもは、子どもの言葉で書かれていても、内容的なものを充分理解できないことがある。それは、経験していないことを聞いたり読んだりしても、その状況が理解できないことがあるからで、そういう場合は、子どもの心に単に知識として与えられることになり、その状況を心の中で描き出すことが充分にできないのである。

大人は経験によって多くのことを学んでいるが、子どもには周囲の環境における身近な体験しか存在しない場合が多い。このようなまだ遭遇していないことを、耳や活字から学び取ることは、一種の追体験であるが、小さな子には無理な場合が多い。

このように、児童文学においては発信者である大人と受容者の子どもの中に存在する大きな障壁を取り除くために、童話や物語の作家は、子どもの心理をよく理解することが肝要である。ここでいう児童文学とは、厳密な意味での児童だけでなく、幼年期・少年少女期の子どもを対象として考えられる心理的な相違について検証しようとするものである。

### 2. 理解し合える共通の広場

もし大人が現在の自分の心境で子どもの行動を判断すれば、そこに大きな溝ができることに気づくであろう。大人は日常の行動や社会的活動において、社会的および経済的価値判断を余儀なくされるため、それがいわゆる常識として定着してしまう。

多くの大人は、社会的によく知られた人物になり、金持ちになることを望んでいるが、子どもは必ずしもそうではない。それは大人の世界での希望であり目的でもある。しかし小さな幼児には、まだ経済的価値の判断が難しく、価値判断の基準が大人とは全く違っている。子どもにとっては、小さなガラス玉が大きな存在価値を持つこともあるし、ダイヤモンドが無視されることもある。道端で拾ったドングリが貴重なものと思われることもある。その価値判断の基準は大人の場合のよう

に客観的のものではなく、たいへん主観的なものである。

童話の場合は、花が口をきいたり、ウサギや猫や犬などの動物が、人間のように話したり行動したりすることがある。それは想像の世界を舞台としているからである。こうした想像上の世界では、すべてが自由である。そこでは時間や空間に縛られることはない。このような思想的に自由な世界を子どもたちは欲するし、解け込みやすいのであるが、それは子どもが持っている自由闊達な思考能力によるものである。

大人が子どものように時間的にも空間的にも自由な世界を闊歩できないのは、日常生活の重圧的束縛によるものである。大人はむしろ、そういう人物を空想家とか夢想家とか言って退ける傾向にある。『どらえもん』のような漫画に興味を示さなくなった大人は、すでに日常性にすっぽりはまり込んでしまっていて、そこから抜け切れないのかも知れない。そういう大人たちにとって、想像や空想は無価値なものであり、益のないものである。しかしながら、そういう大人たちには、もう子どもの世界を理解するのは無理かもしれない。

ピーター・ハントはそうした大人と子どもの児童文学に対する読書の態度について、こう述べている。

For the history reveals some common elements in what the adult sees as the essential children's book, and what the child sees. For the adult there is a potent mixture of nostalgia (often in the form of a rural or suburban arcadia); there are the learning of codes and initiation, group identification, and, strangely enough, retreat. For the child, the wish-fulfilment is forward-looking; it breaks the bounds, it is anarchic in that it has not learned taste and restraint, or has retained the spirit of rebellion, and of hope.<sup>1)</sup>

ここで述べられていることは、大人と子どもでは児童文学についての読書の目的がまったく違うということである。大人はさまざまな制約を受けながら読んでいるが、子どもは何ものにも制約されず非常に自由に読んでいるということが強調されている。実際、子どもは大人が考える以上に思考の飛躍が盛んで、想像力の翼に乗って未踏の世界に没入するが、大人はそうはいかない。

アンデルセンかグリムの童話に、歌を失った国の話がある。長い間の戦争ですっかり国が荒廃し、帰ってきた兵士が歌を探してもなかなか見つからないという。もちろんこれは一種の比喩である。戦後、道徳的に荒廃した国々は、のどかに歌をうたう余裕がなかったのであろう。戦後の日本にもそういう時代があった。戦争中に盛んであった軍歌はもはやうたう人もなく、子どもも大人もうたうべき歌を探していたのである。「りんごの歌」の大ヒットも、そうした中から探し出されたものである。このころ、童謡が復活してきた。そして大人も子どももよく歌ったものだった。それは灰燼の中から立ち上がる日本の姿でもあった。小学唱歌も童謡も、このころは大人にも子どもにも共有のものであった。童話の兵士が探したものは、日本には存在していたのであった。

しかし、大人が子どもたちとうたえる歌がない。このことはある意味で大きな衝撃であると思われる。この事実は、おとなと子どもに共通する広場が、近年、次第に消滅しつつあるということを物語っている。つまりこれは、大人が子どもを理解しきれない現状があると言う証左であろう。さらに、かつては子ども同士に共通する読み物があった。つまり、誰でも読んでいる本や雑誌があったのである。したがって、同時代の人々はもちろん、その前後の人々も、そうした共通の知識を共有できたものである。つまりお互いに共通の広場を持てたのである。

ところが今日、そうした共通の広場はすべて失われてしまったので、大人は子どもと感情を共有することが非常に難しくなっているし、さらに大人同士もばらばらの存在になりつつある。

このことは教育にも問題がある。国定教科書が廃止されて自由な教育が行われることは良いので

あるが、子どもたちにとっても、いわゆる共通の場が消失している。たとえば、小学唱歌の廃止により、親との音楽を通しての交流が切れたのみか、同じ世代の子どもたちですら、学んでいる歌が違って、斉唱もできない現状がある。まれに、ときおり流行する漫画の主題歌などが、彼等の共通の歌となり、もはや「七つの子」の合唱は遠い昔の話になってしまった。

このように、現在では共通の広場をなくした子どもたちは、ばらばらな価値判断を余儀なくされ、大人との交流が難しくなっている。したがって、このような状況においてこそ、児童文学が大人と子どもとの両者の共通の広場を提供しなければならない。

現在、日本の児童文学は岐路に立たされている。どの子も読んだという本がないからである。子どもたちに共通の認識、つまり心が通う共通の場こそ、現在もっとも望まれるものであろう。過去においては小川未明や浜田広介などの童話が盛んに読まれ、それを読んで育った大人たちには共通する背景があった。また、それを読んでいる子どもたちとそうした大人は理解し合えたと考えられよう。いま、子どもの世界が広がり過ぎて、まとまりがない。ゲームに走る子、ひたすら塾へ通って血の通わない知識吸収に明け暮れるのみの子、テレビにかじりついて離れない幼児など、情操の通った場がなく、まったくばらばらの状況にある。子どもたちの輪ができないと、独りで何かにのめり込む子も生じる。つまり「おたく」子の出現である。遊びのなくなった現在、子どもの輪を如何に作るかが、大きな社会的問題となっている。

大人が子どもの世界を理解しようとするならば、現実性と想像性の二面を持たなければならない。実生活を営む大人には現実を直視し、経済活動を重視することが重要であるが、子どもの気持ちを理解するには現実性だけでは物足りない。大人にとっては過去に置いてきてしまった自由な想像力を思い出すことが望まれる。児童文学を子どもと共に楽しめる心の余裕が、現在の大人たちに強く望まれることが理解できよう。

### 3. 子どもの発達段階と読み物

子どもにとって、感情の発達はさまざまである。児童文学はそのようなさまざまな感情の発達段階にいる子どもたちによって、読まれると考えなければならない。人間の精神機能のうちで、とくに必要なものは人としての愛情とそこから発する他人に対する思いやりの気持ち、正しいこと悪いことの判断などであろう。児童文学はそういう精神機能の発達を促す役割を果たしているのであるが、受け取る子どもの方には大きな差があることを、認めなければならない。そしてこの差に応じた読み物が必要ということになる。かつて出版されていた浜口広介の一年生の童話・二年生の童話などは、まさにそうした子どもの発達段階に合わせる意図が作者の側にあったことであろう。

しかしながら、現実にはさらに複雑である。一般の精神機能の発達は、経験的に言うと、男の子よりも女の子の方が先に発達するように思われる。すでに2歳で「蜜蜂ハッチ」を見て、可哀想だと涙を流す女の子もいれば、8歳になっても母親の死を実感できない男の子もいる。したがって年齢だけでなく、別の要素で精神機能の発達を考えなければならない。

おそらく『トムソーヤの冒険』を幼い女の子に読ませても、あまり興味を示さないであろう。それはこの本に書かれている世界が19世紀中葉のアメリカを舞台としたものであるから、現在遠く離れた状況の中では、理解できないものが多いであろう。また、この本ではトムという男の子の動きが活発で、幼い女の子には付いて行けないであろう。その一方で、男の子はこの本を面白いかもしれない。自分がやろうと思っている悪戯を、他人が代行してくれるからである。

男の子の感情の発達が遅いというのも、それは単に遅いというだけであって、女の子よりも感情のピークが低いわけではない。むしろ、大人の男性では、非常に感受性の強い人がいて、詩人や作曲家などで感情の表現に優れている人が、女性よりも男性に多いのも面白い現象である。しかし、

いずれにしろ、男の子と女の子では、その感情の発達段階に大きな差があることは事実である。したがって児童文学においても、その種類と程度において、この両者にはそれぞれ若干の考慮を払わなければならないであろう。

字が読めない幼児には、親を含め周囲の者が読んで聞かせなければならない。つまりこの場合、児童文学は語りの文学になる。したがって、内容もその子にふさわしいものでなければならないであろう。語りの文学はいわゆる伝承文学の一種と言えるが、この場合は現在と伝統が混在するのかもしれない。

ところで感情の発達段階は子どもによってまったくバラバラであるし、記憶の深さも同様である。記憶の深さはその子の感情の深さと大きく関連する。心のどこかに記憶が残るには、それ相当の感情の深さが要求されるであろう。大人になってから振り返ってみると、幼児期の記憶ほとんどない人もいれば、克明に覚えている人もいる。前者は感情の発達の遅い人であり、後者は幼児期より鋭い感情を持っていた人であろう。しかしながら、前者が大人になっても感情の発達が未熟なわけではない。小さなときに少しばかり感情の発達が遅れていたに過ぎず、大人になってからは感情の敏感な反応を示す人も多い。このことはすなわち、幼児期の感情的反応が子どもによって違うことを意味している。したがってこの現象は、幼児期・児童期に限って考えた方がよいと思われる。それは、大人になって幼児期の頃とは全く違う鋭い感情を持つ人も、少なからず存在するからである。

このような幼児期の感情の微妙な差は、一概に年齢によらないことは前に述べたが、一般的傾向としては、もちろん年上の子の方が年下の子よりも感情的には鋭く反応すると考えられる。したがって童話作家は、子どもの平均的感情発達のレベルに対応して物語を書くことを余儀なくされる。

さらに理解度も重要な要素である。物語をよく理解できるかできないかは、おおよそその子どもの知性の発達段階に大きく依存すると思われる。もちろん知的に発達している子は、そうでない子よりも物語の内容を理解するし、その物語に盛られている美的・感情的・道徳的な意味も理解できよう。面白さと興味と言う点では、確かに知的な子どものほうが強く反応する。しかしながら、知的レベルの高い子が、必ずしもその物語を感情的に深く受容するとは限らない。知性と感情は別の精神機能であると思われ、相関性はないとは言えないけれど、両者は別々に作用すると考えられる。

物語の内容の受容として、もうひとつ大きな要素がある。一般に物語の世界は、筋に変化があって動きの早いものと、人間と擬人化された動植物との友情や愛情が中心となるものに大別される。前者は主として男の子が対象になると言っても過言ではないであろう。したがって児童文学を語る時、絶対に性差を無視できないと思われる。

男の子は動きを好む。したがって『ロビン・フッド』の物語や『ホラ吹き男爵の冒険』などといった次々に場面が展開される物語が大好きである。だいたい男の子は、自動車や列車が大好きであるし、恐竜の闊歩する映画も好んで観る。日本でも幼児の観るテレビ漫画などでも、男の子は何々レンジャーとか、ロボットの活躍するものが大好きである。

一方、女の子は比較的動きの少ないが、愛情をテーマとしたものが好きなように思われる。また可愛い動物の活躍する物語が好きである。前者の代表としては、『アルプスの少女』や『クオレ』、アンデルセンの『マッチ売りの少女』などがあり、後者の代表例として『ピーター・ラビット』、『パディントン・ベア』、『クマのプー』などがある。とくに後者に至っては、相当の年齢の女性でもファンが多く、『ピーター・ラビット』の作者ベアトリックス・ポターに住んでいた家を訪ねて、イギリスの湖水地方のソーリー村まではるばる訪ねる若い女性も多く、さらに、プーさんのぬいぐるみも、幅広い女性層に人気を博している。

このほか、女子に人気のある物語は、いわゆる「シンデレラ症候群」を生じる物語のたぐいである。たとえば、グリムの『白雪姫』やバーネットの『小公女』などは、女の子が好んで読む物語であろう。白馬に乗った王子様が救いに来てくれるといった、一見ばかばかしい物語も、幼児にとっ

ては楽しい空想であろう。大人でも通常このように「棚からボタモチ」式のことを期待することも多いであろうが、子どものころには恐らく一度はこうしたことを考えた女性も少なくないであろう。この種の物語は、幼児にある種の夢を与える意味で、決して一部の大人たちが考えるようなものではなく、子どもの思考の発展段階において一度は通る空想の樂園なのかも知れない。

このように、物語の対象が男の子か女の子によって、その物語を読む子どもたちによる評価は大きく違う。また違って当然であると考えられる。したがって、対象となる読者の性別は、物語の選択に大きな役割を果たすと言える。このように考えてくると、読み物を選ぶ場合には一律に年齢によって区切るのではなく、対象とする子どもの感情の発達レベルと性差に注目して、もっとも適切なものを与えなければならないと思われる。

大人たちもかつては通ってきた道であるが、子どものころの心理状態をすっかり忘れている。したがって大人がよい物だと思っても、子どもにとっては違った物として受容されることがある。子どもたちの価値観と心理を、大人たちが理解しなければ、児童文学に進歩はない。こうした大人と子どもの思考の乖離は、大人たちが現実から離れられず、幼い時を思い出すほど心の余裕がないことによるものであろう。大人も子どもと同様に想像力を働かせて、空想の翼に乗って羽ばたかなくては、子どもの世界と子どもの心理を理解できないであろう。

その上、現在では多くの先進国で、児童文学の関わるさまざまな現象が錯綜している。

A contemporary phenomenon is the imbalance in age groups served, with masses of picture-books published, in contrast to the comparative paucity of books for the middle years during which most children do most of their reading. People are also concerned with the amount of time devoted to television; they worry about whether increasing technological sophistication will make printed materials, and their use, rare if not obsolete. They worry about poor reading score.<sup>2)</sup>

ここに記されていることは、現在の日本にも当然当てはまる。子どもたちの読書を通して得られるはずの人として必要な知識や教養が、テレビやゲームに時間を費やすあまり、人間社会の倫理規範や道徳性の欠如を助長している。このことは、児童の精神的・叙情的発達を考えると、21世紀の現在においてもっとも憂慮される問題である。

#### 4. 課題の妥当性

まず読み物は、子どもが理解できるものでなければならない。もちろん子どもはすべて発達の過程にあるため、未経験な新しいことを理解しにくいに相違ない。また理解して自分の知識としなければ、知的な進歩は望めない。したがって知的発達の段階にある子どもにとって、易し過ぎても効果は少ないし、まったく理解できないものでも効果がない。その段階には、内容の理解と文字や言語の理解度の二重性がある。

物語を語って聞かせる幼児の場合には、内容的なものの理解が中心で、文字の理解はまた別の次元である。親や周囲の者の語りによる文学の伝達は、幼児を知的に刺激することになり、叙情性や感受性を涵養するのに大いに役立つはずである。語りも児童文学に重要な一分野であることを考えれば、これは具体的事例により、将来詳しく研究する余地の多い領域である。しかし物語の生産と消滅というような経時の変化にあって、歴史的にどのようなものが評価されてきたのかを、いろいろな角度から捉えることが必要である。

児童を対象とした一般の児童文学は、やはり読者である子どもが、読むことを前提としている。

それにはまず、文学が読まれなければならないので、子どもたちに良い読み物の存在を教えることが必要とされる。近頃の児童文学といわれるものの多くは、対象とする児童の学年や年齢を特定していない。つまり平均的な児童を想定して書かれているのである。したがって児童が本を読む場に、難しいと感じる子とその反対の子が生じることになる。ここに課題の選定ということが重要なものとなってくる。

児童が本を読む場合、恣意的な場合と半ば強制的な場合がある。多くの場合、児童は自分が読めそうな本で興味を惹く本を、自分で探してくるであろう。しかし時には、学校で薦められたり、課題として提示された本を、半ば強制されて読まされることもある。前者の場合には、自分の興味と合致する本であるため、児童は夢中で読むことになるであろう。したがってその本から得る知識や刺激には大きなものがある。後者の場合には児童が本の中にのめり込まないことがある。それは自分の興味とは離れたものを読まされているという実感から生じるものである。

ここでまた、子どもの心理と大人の心理が問題となる。大人も子どもも等しく共感を持って読める本は、それほど多くない。大人の趣味や価値判断から本を選んだとき、子どものそれとは大きく乖離することがある。本の傾向によって異なるが、たとえば女性が、男の子に与える書物を選ぶようなときには、女性から見た基準で選んでしまい、男の子の心理を理解しないまま、この本は良い本だからという主観的な判断のもとに推薦することがあるし、また、逆のこともある。

要は読者である子どもを中心に考えて、読書環境を整備する必要があるということである。つまり個々の子どもの興味あるものが、それぞれの子どもにもっとも熱心に読まれるのである。そこにはやはり男女差が生じてこようが、これは自然の傾向であろう。例をあげよう。『ハックルベリー・フィンの冒険』は面白い本であるが、『トムソーヤの冒険』と同様、アメリカという舞台を理解していないと、内容をよく理解したとは言えないであろう。しかし、ハックルベリー冒険そのものは、男の子はわくわくしながら読むであろうが、女の子にはまったく興味が湧かないことがある。逆の場合を考えよう。『若草物語』の4人の姉妹の生き方には、興味を持つ女子児童も多いと思う。それぞれの姉妹がどのように生きていくかについて関心があると思われる。しかし、動きの少ないこの種の物語には、多くの男子児童は多分興味を持たないであろう。

このようなことから、子どもの心理とくに男の子と女の子のそれぞれの心理を、指導者としての大人は、よく理解しなければ、適切な読書指導はできないように思われる。

近頃子どものために書かれた本が星の数ほど出ていて、新作童話と言われているが、そのうちどのくらいの割合の本が、子どもの目から見た情景や心理を描いているのかは、大いに疑問である。

During the twenty or so years that followed, the status of children's literature as a subject changed dramatically. From being the concern of a few brave individuals, who were often on the defensive against charges of triviality and were as likely to be collectors as critics, children's books became the focus of countless courses, conferences, centres of study, and works of scholarship.<sup>3)</sup>

ここで述べられているように、最近とくに児童文学の分野の裾野の幅が広がっている。大人の文学やテレビで、刑事ものやルポルタージュものやSFものなどが流行したりすると、子どもを対象とする文学にも同じ傾向が現われる。こういう多様化の傾向に対応するためには、選択の能力を備えなければならない。それは多分に大人の役割であろう。

ところで、近年の大人には、子どもの本は道徳を盛ったものは好ましくないとする人たちがいて、審美性や抒情性のみを強調するが、それは大きな間違いと思われる。子どもに道徳教育は必要である。十分に道徳的な読書をさせずに大きくなった子どもがふえている現在、社会的犯罪の年少化が

起こっている。これは、取りも直さず家庭での道徳的な躰の欠如が主因であるが、道徳的読書環境の低迷がまた大きな要素となっていると考えられる。「鉄は熱いうちに打て」と昔から言い継がれているが、幼少期の子どもたちへの道徳教育は現在、見直されており、読書もそれに大きく関わっているとと言える。このように、大人の心理の時代的変容もまた、児童文学に対する大きな影響を与える要素となっている。

## 5. 純粋性の追求

子どもは純真である。子どもは自分が考えること以外には興味を持たないことが多いし、それに没頭するのが普通である。路上にボールが転って来たら、その後から子どもが飛び出して来ることは、日常経験するところである。一つのことに熱中できるのも、子どもの特性かもしれない。子どもの心をまったく失った大人には、子どものしていることは何とも馬鹿ばかく映るかもしれない。しかし、そのひた向きな心が重要なのであり、児童文学はそういう子どもを対象にしている。

大人には理解し得ないそうしたひた向きさは、大人もかつては持っていたのであるが、すでに遠く彼方に忘れてきてしまっている者が多いのが現状である。何事にも夢中になれて、純粋にそのことのみ精神が集中することは、大人には難しいと思われるかも知れない。絶えず生活のことを考え、金銭のことを考慮し、人付き合いを気にしている生活習慣が重って、子どものように、ただ一心に一つのことに集中できない人がほとんどであろう。しかし子どもは違う。児童文学はそういう子どもたちがのめり込む場所でなければならない。

子どもの純粋性とは、つまり、その他のことが入り込まず、ひたすら考える一つのことに熱中することから生じる。すなわち、そこには大人の価値観は入り込めないのである。その純粋さがさらに深まると想像力が働くことになる。『夜間飛行』や『星の王子さま』でよく知られているサン＝テグジュペリは帽子のような絵を描いて、これは何かと問うている。外観だけ見て、帽子と答えるのは、まず大人であろう。想像力豊かな子は、その中に象がいると考える。こうした思考の飛躍は大人には望めないであろう。

『母を尋ねて三千里』という本がある。少年がひたむきに母を探して、長い旅をする物語である。それはまさに子どもの集中性の典型である。忙しく、飽きっぽい大人は、すぐに別のことに目が向き、さらに利益や優位性を求めて発展的に展開していくことがあるが、子どもの純粋性には、多くの場合、ほとんど利益に拘わらず、損得の感情がほとんど見当たらないことが多い。子どもの心はそれだけひたむきで純粋なのである。

児童文学の課題もまた、子どものこのような純粋性に対応するものでなければならない。そういう点から言うと、文学のジャンルにおける純文学的な意味が強くなるが、しかし審美性の追求ばかりが児童文学の目的ではない。もちろん実世界の経験の少ない子どもたちに、生活環境の実態を教える必要がある。昔は、子どもは母から必要なものをすべて与えられていたので、少なくとも幼児期には金銭感覚をあまり持たなかった。しかしながら、現代の鍵っ子と言われる児童たちは、いやでも実生活の経済的実態を知ることになる。しかしながら、子どもは実世界の様子を、その成長に従ってゆっくりと知ってゆくことが、好ましいと言える。背伸びをして大人になる必要はどこにもない。だが、感情だけは健やかに育ててもらいたい。

子どもが巣立つ過程ではそれぞれまったく異なった経験をしてくるので、その成長環境も家庭環境も教育環境もすべて多様である。したがって趣味や興味も、子どもだからといっても必ずしも同一ではない。

Just as rap music and Mozart both deal in sound, but cannot reasonably be compared

otherwise, so the same reasoning extends to children's books:<sup>4)</sup>

とハントが言うように、大人たちは子どもの本についての多様性を許容しなければならない。しかしそれだからといって、純粋なはずの子どもの世界に、大人たちが経験している不純さを持ち込んではいけません。しかし子どもに社会の現象を理解させる必要もあるので、書物の多様性は否定できません。そこに選択という大きな問題が存在する。

しかしながら、子どもに社会現象の新しい側面を提示するだけでは、良い文学作品とは言い得ない。子どもには正しい情緒教育が必要であり、心の純粋性を保つ効果のある書物が必要である。それを担う大きな役割を果たすのが、児童文学である。したがって児童文学は、子どもがひたすら物語の世界に浸れるようなものでなければならない。こう考えてくると、つまり、子どもが先天的に持っている受容性のうち、情緒的なものに対する受容性を純粋に高めることに、児童文学はその存在意義を有するのである。

## 6. まとめ

これまで述べてきたように児童文学は子どもを対象にするものであるから、当然、子どもの心理に関わるものであり、子どもの感情や思考の涵養を目的とするものである。つまりそのことは、大人の心理から発したもので、大きな錯誤が生じる恐れがあることを意味する。児童文学はあくまでも子どもの立場・子どもの心理にのっとって書かれなければならないように思われる。そのためにはまず、大人と子どもの価値判断の相違について、充分理解されなければならない。両者の考える価値あるものは、大きく乖離するが、そのことは大人たちが通った道であるにも拘わらず、大人は忘れてしまって理解できないことが多い。したがって、子どもの心に返ることが望ましい。

一口に言うと、子どもの感情の発達にはばらばらであり、性差においても興味の対象が違うことを大人は理解しなければならない。

そしてさらに、個々の子どもに与える課題の妥当性についても、大人の立場からではなく、子どもの立場で考えなければならない。本当に好きな本なら、子どもは幾度読み直してもあきないものである。そうした本を与えることが、子どもの情緒を豊かにすることに繋がると思われる。

子どもは、純粋であり、汚れを知らない。そういう純粋さは、想像力という強くて大きな翼を持つ。子どもはその想像力の翼に乗って未踏の思考をするのである。

このような理由から児童文学においては、大人の心理からでなく、子どもの心理を尊重する立場が強く望まれる。

### 註

- 1) *Children's Literature*, ed. Peter Hunt (Oxford : Oxford University Press, 1995), p.xi.
- 2) *Ibid.*, p.321.
- 3) *The Oxford Companion to Children's Literature*, ed. Humphrey Carpenter and Mari Prichard (Oxford : Oxford University Press, 1984), p.vii.
- 4) Peter Hunt, *An Introduction to Children's Literature* (Oxford : Oxford University Press, 1994), p.188.